
魔法少女リリカルなのは～三つ足の鴉～

ジオニックフロント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜三つ足の鴉〜

【Nコード】

N4572L

【作者名】

ジオニックフロント

【あらすじ】

海鳴市に住む小学6年生のとある少年はベルカの騎士だった。しかしやる気の無い彼は戦いの日々よりも安寧とした平凡な生活を好んでいた。そんなある日少年はとある出来事を切っ掛けに平凡の生活に別れを告げ、SFチックな非日常的な世界へと足を踏み入れる事になる。はたして少年はどうなってしまうのか!?

第一話 とある月夜と銃騎士（ガンナー）（前書き）

処女作品です。作者は文才が無く他の作者様の作品を参考に執筆している部分があり、それ故に文章表現の中で何処か似通ってしまう部分があるはずです。その点についてはぜひご容赦の程、お願いいたします。

第一話 とある月夜と銃騎士（ガンナー）

秋も過ぎ、これから寒い冬が始まるうとする11月。春に起きていた変な魔力反応も収まり、ようやく平穏な日々が帰ってくる。安心していた時にその事件は起きた。

とある日の夜。突如、風呂が壊れたたので久しぶりに銭湯に行った帰りのことだった。

「綺麗な月だねえ」

雲一つも見当たらない透き通った夜空に輝く月。夜道を照らすその月は優しく輝き、あたかも赤ん坊を見守る母親の如く、美しかった。

3

「まあ、母親なんてモンは知らないんだけどね」

祖父によると自分の母は俺を産んですぐに病気で死んだらしい。父もまた行方知れずで生きているかも解らずじまい。男手一つで育ててくれていた祖父もまた一昨年の暮れに亡くなり、今では一人暮らしに近い状態だ。

おっと、自己紹介が遅れたな。俺の名前はさいかまじゆき雑賀孫幸聖祥小学校に通う小学6年、12歳だ。自分では平凡な小学生のつもりをしているが実を言うと俺は魔法が使える所謂魔導師と呼ばれる存在だ。元は普通の小学生をやってたんだが、突然転移してきた輝夜を見た祖

父ちゃんが事細かく説明してくれた。

さらに言えば祖父ちゃんは元管理局の高官で本局教導隊というところの統轄官だったらしい。

ともかくそんなことがあり、めでたく(?)魔導師に俺はなったのだった。

「なにを辛気臭い顔をしているのじゃ？」

「ん?なんでもねえよ。気にすんな」

「そうかの？」

「そうなの」

パーカーのフードからひょっこりと顔を出したコイツの名前は輝夜。さつき説明したとおり俺の家に突然転移してきたユニゾンデバイスだ。古代ベルカの由緒正しいデバイスとっておきながら容姿は黒眼黒髪のみるつきり日本人な上に、口調がどこぞのお姫様。まあ、俺にとっては家族みたいなモンなんだけど。

「それにしても寒いよなあ、肉まんでも買って帰るか？」

「む、それなら妾は、あんまんが好いのじゃ!!」

「へいへい、あんまんね。了解、了解」

ここから一番近いコンビニは何処だったかな?と考えると突如世界の色が変わった。

まるで、この空間だけ切り抜かれたかのような違和感を覚える。

そして、この感覚はどこかで感じた気がすると思い、輝夜に声をかける。

「なあ、これってまさか……」

「ふむ、結界じゃの。しかも、妾達と同じベルカ式の使い手のようじゃ」

「マジか……。俺の平穏な生活は何処へ……?」

5月あたりに頻繁に起きていた魔力反応と戦闘の気配もピタリとなくなり、やっと面倒事が過ぎ去ったにも拘わらず、この有様に自然と口から某幻想殺しの手を持つ少年と同じ言葉が出ていた。

「不幸だ……」

「言っておる場合か!? 来るぞツ!!」

輝夜の言葉に、とつさの判断でバックステップでその場から下がると刃物が空を切る音と、地面が抉れる音がほぼ同時に鳴り響いた。

「おいおい……。あぶねえってモンじゃねーぞ、コイツは……」

俺が居た所には10センチ近くも地面が陥没しており、これをもし自分が生身で受けていたらと思うと背筋がゾツとした。

「ほう、今のを避けるとは……」

視線を地面から上に移すとそこには一人の女性が立っていた。

年は20前後で髪はピンク、バリアジャケットである甲冑を身に纏い、右手には剣型のアームデバイスらしきものを持っている。顔つきも整っており、お世辞抜きで美人といえるものだった。

「ほう、じゃねーよテメー。俺の事殺す気か!？」

「非殺傷設定だ、安心しろ」

「ふざけんなバーカッ!!非殺傷だろうとそんなんでやられたら簡単に死ねるわッ!!っーか、誰だよッ!？」

「名乗る必要ないな。貴様の魔力戴いていくぞ」

瞬く間に話を一方的に切り上げられたうえに再びその女性は俺に向かつて剣を振り上げ、襲い掛かってきた。

「なっ!?!ちょ、おま、人の話を・・・」

《障壁発動》

ぎりぎりのところで障壁を張ることができ、攻撃を防ぐことに成功した。はっきり言えば魔法の厄介ごとなんかは御免ごうむる所だが、命の危険性がある以上そんな事は言ってられない状況だ。

「しゃーねー、やるしかないか。輝夜、先に帰ってる」

「うむ、キバって行くのじゃぞ?」

「分かってるっての。八咫鴉、起動」

《声紋確認、起動開始》

ライフルの形をしたキーホルダーから男声の機械音声が放たれると、エメラルドグリーンの光が俺の全身を包む。

《起動完了、甲冑展開》

光がやむと、ジーンズに厚手のパーカーにスニーカーという比較的ラフな格好から革のブーツ、濃緑のミリタリーパンツに黒のインナー、そしてパンツとほぼ同色で背中には三つ足の鴉が描かれたロングコートへと変わる。

「その術式・・・、私と同じベルカ式、ということは貴様は騎士か！？」

「騎士つつーか、銃騎士ガンナーの方があつてるかな？まあ、ともかくこれからが本番だぜ？来いよ」

デバイスを肩に担ぎ、反対の手で相手を挑発する。

「フツ、行くぞ？ハアアアアアアアッ！！」

気合の籠った声と共に剣を振りかぶり迫ってくる。俺はそれを牽制する様に何発か魔力弾を相手に撃つがバリアで阻まれ怯むことなく此方へ飛来し剣を振り下ろした。

ガキンツと金属同士がぶつかる音がその場に鳴り響く。

「ちっ、そう簡単にはいかないか」

「無論だ。ベルカの騎士は簡単にはやらせないさ、貴様もそうだろ

う?」

デバイス同士がぶつかり、鏝迫り合いの形になる。向こうは恐らくだが、ランクで言えばSに近いぐらいだろうか。それに比べて、こっちは今のところはAAA-、パワーも持っており、魔力、パワー共に此方が劣っている。となれば俺は、手数の方と技術で勝つしかない。

「確かに、簡単にやられるつもりは無いよ、っと」

《閃光》

「クッ!？」

パチンと一回フィンガースナップを鳴らすと思わず目を閉じるほどの強い光が起きる。これは俺が自作した目くらまし用の魔法で、閃光弾の様な物だ。それを発動し、距離を取る。

「八咫鴉、カートリッジロード」

《了承。装填完了》

ガコンと薬室から弾丸が一発廃棄される。

「虎爪三連」

《放射》

引き鉄を引くと銃口から三発の大き目の魔力弾が敵に向かって飛んでいく。仕留めたとは思わないが一発ぐらいは当たっているはず

だ。

「なかなかの威力だ。だが、私を倒すにはまだ足りんツ!! レヴァンティン!!」

《Explosion》

向こうもカートリッジを使い魔力を高める。

「紫電一閃ツ!!」

炎に包まれた刃が肉薄する。これをまともに受ければ軽い怪我では済まないだろう。が、しかし

「あえてここは正面で受け止めるツ!!」

《玄武甲三殻、展開》

六角形のまるで亀の甲羅のようなバリアが三重になって出現する。最大五殻まであるこれはオーバースの魔法ですら容易く防ぐことができる通常の障壁よりも威力が桁違いの防御魔法なのだ。

「ぐっ!? 堅い!？」

「銃剣着装!!」

《了承。銃剣着装》

「ウラアツ!!」

「下から上へ、逆袈裟に振るった刃が相手の身体を切り裂く。とつさに避けられ、掠る程度に止まったものの、俺はこのチャンスを逃さないように連撃を掛ける。」

「薙ぎ、払い、刺突、時には同時に魔力弾を撃ちながら攻撃の手を休めずに攻め続ける。」

「相手もまた同様に剣を振るい続け、お互いのダメージが段々と蓄積されていく。」

「ハア、ハア・・・中々の腕だな、名はなんと云う？」

「ああ？テメー、名前を聞くときはまず自分からって習わなかったのかよ？」

「そうだな、失礼した。我が名は烈火の将・シグナム、そして我が愛剣レヴァンティン。貴殿の名を伺いたい」

「雑賀衆頭領・雑賀孫幸、んでコイツは八咫鴉だ」

「ふむ、よい名だ。では再度、行くぞ雑賀ッ！！」

「ああ、来いよッ！！シグナムッ！！」

「お互いの武器を構え、睨み合う。今、思い返せばこの出来事こそが俺にとっての魔導師として生きる切っ掛けだったと言えるだろう。」

「八咫鴉「レヴァンティンッ！！カートリッジ、ロード！！」」

《了承。装填完了》

《Schlangefrom》

「霸龍鉄閃ッ!!」

蛇腹状になった刃を振るい切りつけようと、俺はその刃をかわして魔力で通常よりも威力を高めた銃剣でシグナムの胴を切り裂こうと狙う。

しかしシグナムはそれを許さず迎撃、それも再び巧みにかわして銃撃を交えた攻撃を続ける。

そんな壮絶な戦いが1時間近くも続けられていた。

《Stellungwinde》

「せえええい！」

レヴァンティンから衝撃波が発生し襲い掛かってくる。

まともな回避行動も取れなかった俺は吹き飛ばされ、コンクリートの壁に叩きつけられた。

「かはっ！」

更にシグナムが追撃すべしと、ボディブローを叩き込まれる。

だが、ここで負けてやれるほど俺は甘くない。

密着したのを良いことに胸に銃口を沿え、シグナムに連続の魔力弾をゼロ距離で叩き込む。

連続しての衝撃を歯を食いしばって耐え抜き、俺の顔面を掴むよ

うに掌打を放ち、後頭部が壁に叩きつけられる。

俺は朦朧とする意識の中で、さらにもう一発中距離型の砲撃を叩き込む。

最早二人は互いに蓄積したダメージに耐える事ができず、そのままとつれ合う様に倒れこんだ。

1時間に及ぶ激闘の末、俺の身体からは所々切り裂かれ血を流し、シグナムも同様にボロボロになっていた。

俺達二人は荒い呼吸をしながら、抱き合うように倒れていた。

「……………やっぱ……………強えーのな、アン、タ……………」

「フツ……………お前もその年で大した……………腕前じゃないか……………」

「そうかよ……………ま、褒められて、悪い気はしない、けどな……………シグナム」

「……………なんだ？」

「魔力、要るんだろ？持ってけよ……………」

「だが、いいのか？」

「なんか、事情があんだろ？それに……………」

「それに？」

「名前を交わして、お互いの拳を交えた。だったらもう俺とお前は敵同士じゃなくて友達だ。ん
で、ダチを助けんのは当然、だろ？」

身体の到る所から痛みを感じるが、そこを堪える様に笑顔をシグナムに向ける。気付けばお互い抱き合う様に倒れこんだままで、異様にシグナムの顔が近い。

「ダチ……か……」

「そう、ダチだ。ま、今回は拳じゃなくて剣と銃なんだがな？」

「そうか……済まないな、恩に着る」

「気にすんな。さ、とつととやってくれ」

「ああ、少し我慢してくれ」

シグナムは俺の胸部辺りからリンカーコアを抉り出す。

「ぐ、がああああっ!？」

「……済まん。もうしばらく耐えてくれ」

激痛にのたうつ俺をシグナムは辛そうに目をそむけ、虚空から一冊の魔導書呼び出した。そして俺から取り出したリンカーコアから魔力を抜き出し、その書に食わせると、凄まじい速さで大量のページが埋まっっていく。

「90頁を越えるか……。大漁だな」

「シグナム・・・なんだ、ソイツは？」

「済まないが・・・それを言う事は出来ない」

シグナムの持つ魔導書からは並々ならぬ悪意や怨念と言った負の感情が籠っており、凄まじいぐらいの禍々しさを放っていた。

「ソイツは危ねえぞ？ソイツからドス黒い何かが溢れ出てる」

「それでも・・・私はこれを完成させなければならない。それは聞けない相談だ」

どうやらシグナムの決意は固いらしくこれ以上俺が何を言っても無駄なようだった。

「ではな。私はもう行く」

「・・・待てよ」

「何だ？」

「あんま無茶すんじゃないやねえぞ？誰の為かは知らねえが、お前が大事にしたいソイツは同じようにお前の事を大事に思ってたんだ。分かるな？」

「・・・無論だ」

「ならいい。後、なんかあれば俺に連絡しろ。格安でこの日ノ本で最強の傭兵、雑賀衆が頭領、雑賀孫幸が手伝ってやるよ」

「フッフ、そうだな。そのときは頼もうか。では、な」

そう言うとシグナムは今度こそ何処へと飛んで行ってしまった。

「ふむふむ、これは手酷くやられたようじゃの？」

「うっせ。初陣で格上相手に引き分けたんだ、文句はねえだろ？」

シグナムとの戦闘の後、身体中の痛みを堪え自宅へと帰宅した俺は先に帰っていた輝夜の手によって負傷したところの治療を行って貰っていた。

「まあ。ふむ、これで十分である、どこか不備はあるか？」

「いや、問題無い。手間を掛けたな輝夜」

「妾は主のパートナーじゃ、それくらいなんとも思わん」

「あんがとよ。ま、こんな事ももう滅多にないだろうけどな？」

「まったく……。お主、少しは積極的に事に関わろうとは思わんのか？せっかくの才能じゃというのに
勿体無い」

「んなこといったってよ、俺は平和主義の事なかれ主義なんだ。特に理由も無く関わる気は無いのさ」

Tシャツを着なおしながら、輝夜の疑問に答える。管理外の世界なのにわざわざ魔法の厄介ごとに関わる気はさらさら無いというのが俺の本音だ。

「だけど、シグナムにはリベンジしたいな。負けっぱなしってのは性に合わないみたいだ」

「そうか……。ま、頑張る事じゃな」

二人が見上げる夜空には未だに優しい光を放つ月が凜として輝き世界を見守っていた。

第一話 とある月夜と銃騎士（ガンナー）（後書き）

はじめまして、ジオニックフロントです。

今回はこのような駄文を最後までお読みいただきありがとうございます。ありがとうございました。

次回もなるべく早く更新したいと思います。

誤字脱字、文章へのアドバイスや感想をお持ちしています。
では、また次回。

第二話 とある休日と関西少女（前書き）

更新遅れてすみません！！

第二話、完成しました。

文才の無い作者な為、一話よりクオリティが劇的に下がっているか
もしれません！！

第二話 とある休日と関西少女

シグナムに襲撃されてから一週間。その後の俺は久しくやっていなかった魔法の練習を一日と欠かさずにするようになっていた。

とは言っても、そこまで派手なものじゃなくて、体力作りや魔力操作などの基礎中の基礎である。これは死んだ祖父ちゃんが教導官時代に書き残した、雑賀孫七著『教導のすゝめ』という教導官向けの参考書の一番初めの項目のページに記されていた、「基礎を疎かにするものはカスだ」という文章を元に長い間やっていなかった訓練を再開するにあたり、基礎からやり直そうと考えたのだ。

そのお陰で魔力の編み込みや細かい操作の腕が上達し、今までのよりも少ない魔力消費で魔法を行使する事が出来るようになった。

「ふう・・・とりあえずこんなもんか」

それにしてもこの参考書は教導に携わる人間以外でも楽しく読める代物だ。所々に書いてある祖父ちゃんの昨今の教導に関する愚痴や毒舌的なものがシユールで読み手を飽きさせないのだ。それだけでなく魔法術式もミッド式、近代ベルカ式、古代ベルカ式に区分されていてその上に、近接系、中長距離、後方支援、医療系、召喚など事細かに記されているのでこの一冊で技術の幅が大きく広がるのだ。

「孫、腹が減ったたのじゃ」

「ん、分かった。朝飯用意するからちよっと待ってる」

汗をタオルで拭い、キッチンへと向かう。祖父ちゃんが死んだ今、キッチンという戦場は俺の領域だ。祖父ちゃんが魔導師として目覚め、管理局で働くようになったのは20半ばらしくそれまでは高級ホテルのシェフをしていたらしい。ただ喧嘩っ早く、よくイチャモンを付けて来たはた迷惑な客を速攻にフルボッコにし、その時に付いたあだ名が戦うコックさんだったらしい。まあ、腕が良かったのでクビになる事はなかったらしいが

「輝夜、出来たぞ」

「うむ、今行くのじゃ」

テーブルに並べられたのは日本の朝食の定番である焼き鮭、味噌汁、ご飯と漬物が少し。それらを確認した輝夜は、満足そうに椅子へと座る。

「「いただきます」」

食事の時のみアウトフレームを使い大きな身体になる輝夜。彼女の箸使いは以前と比べ比較的に上手になってきている。

輝夜はまた一歩、日本人に近づいた！！

某長編RPG的な音楽が脳内に流れる。少し疲れが溜まっているのだろうか？

「む、どうかしたのか？」

「いや、なんでもない。それより此処、ご飯粒ついてるぞ？」

そういいながら俺は輝夜の顔へと手を伸ばし、ご飯粒を指で取るそのまま口へと運んだ。

「なっ！？／／／／／／」

「ん？どうかしたか？」

急に頬を赤く染め、驚いた表情をする輝夜。

「い、いや。なんでもないのじゃ、うん。なんでもないのじゃ」

「そうか？」

明らかに動揺しているが何の事かさっぱりだし、本人がなんでもないと言っている以上、特段聞きだす必要も無いのだろう。

そして食後、湯飲みに入ったお茶をこれまた日本人のような慣れた手つきで一口含むと輝夜は、ふと思い出したかのように話を切り出した。

「そういえば、孫。お主が戦った騎士の名、なんじゃったかのう？」

「シグナムか？アイツがどうかしたのかよ？」

「おお、そうじゃったの。してそのシグナムじゃが、烈火の将と名乗ったのじゃな？」

「ああ。んでデバイスがレヴァンティンだったかな」

「ふむ、そうか。ならば、アヤツは夜天の守護騎士、ヴォルケンリッターの一角で間違いなかるう」

「なんか知ってるのか？」

「うむ、ヤツらは古代ベルカにおいて作成された魔導書『夜天の書』という大型のストレージデバイスにおいて生み出された書とその書をもつ主を守護するための魔導プログラム体なのじゃ」

「ふーん、つーことは生身の人間とは違うんだな？つかヤツらってことは他にもいんのか？」

「いかにも、烈火の将を始め、鉄槌の騎士、楯の守護獣、湖の騎士、そして書の管制人格の5人じゃな」

「5人ねえ……。どっかの戦隊モンみたいだな」

ベルカ戦隊ヤテンジャー、ってか？と笑いながら温くなったお茶を口に運んだ。

「茶化すでない、アヤツらは騎士として最強の一角じゃ、最近まで鍛錬をサボっていたお主なんぞペペペのペーってやられてしまうのがオチじゃな」

俺の言葉にそう言って返す輝夜。確かに、未だ自分が小学生+初見ということもあってシグナムは何処か慢心的なものがあったのだろう、それでギリギリ引き分けだったのだから、シグナムと俺の差はまだまだなのだろう。つーか、輝夜よ。ペペペのペーって何だ。

「つまりは、要精進ってコトじゃな」

「へいへい。そういや、その夜天の書つてのは危ねえモンなのか？
なんつーか、呪いみたいなのとかさ」

「いや、本来はその時代の魔法術式を後世に残すための魔導書、そのような事は無いはずじゃが・・・、なんかあったのか？」

「シグナムと戦ったときにソイツを見たんだが、妙に禍々しいつーか、ドロドロしいつーか、こつ悪意みたいなのを感じがしたんだよな」

「ふむ、妾が最後に見たときはそのような感じは見受けられなかったのじゃが、ともあれ確認してみなければ分からの、何かしらの機能が狂つておるのかもしれない」

「なるほど・・・、まあいいや、とにかく俺は図書館に本を返しに行くから留守番頼むな？」

そう言つて俺は借りてきた本の入った鞆を手に取り自宅を出発した。

こうしてやつてきたのは市立の図書館。市内最大の蔵書数を誇る大型の図書館で幼児向けの絵本から大人向けの哲学書などが多く貸し出しされている。

ついで早々に借りていた本を返却すると俺は新しく借りる本を探すため館内をうろついていた。

「ん、今日はどうすっかな」

読書に関しては趣味というより習慣に近いと言えるだろう。幼少期から本を読む事を祖父ちゃんに強要されてきた俺は、いつの間にかそれが習慣となり、逆に何かを読まないと落ち着かなくなってしまうっていたのだ。

「これでいいか」

そう言っつて本棚から取り出したのは『今日から始める太極拳』である。身体には気というエネルギーが循環しており、その巡りを良くする事で健康でいられるという内容だった。

なんとなく面白そうな気がしたのでそれを借りるべくカウンターへ行こうとするとふと視界の中にとある光景が目に入った。

「ん？」

その光景とは自分よりか2〜3歳ほど年下の少女である。彼女は足が悪いのか車椅子に座っており、届かない本を取ろうと必死に手を伸ばしていた。

周りを見回すと気付いていながら無視を決め込んでいる大人達の姿。それに憤慨を覚えながらも彼女へと近づき、取ろうとしている本を手に取り彼女へと話しかけた。

「これか？」

「え？あ、うん。おおきに」

「他に届かないモンあるか？とつてやるよ」

これが俺とこれから長い付き合いになっていくだろう彼女との初めての出会いだった。

ある程度、彼女の手伝いをしたあと図書館内のベンチに座り、他愛の無い会話を交わしていた。

「そういえば、まだ自己紹介もしてなかったな。俺は雑賀孫幸、よろしくな？」

「わたしは八神はやて、こちらこそよろしくです。それにしてもほんまにおおきに。読んでた本の続きが届かなくて困ってたんよ」

「ん、まあそれは困った時はお互い様ということだ」

「そうかあ？でもなんかお返ししなあかなあ・・・」

「別にそこまで気にする必要はないだろ？俺もそんなつもりで手伝った訳じゃないしさ？」

「でもなあ・・・。そうや、孫幸くんお昼まだやる？」

「ん？まあ確かに。つか、もうそんな時間なのか？」

ポケットから携帯を取り出し、時間を確かめると午前11時47分を指していた。既にお昼時である。

「せやから、さっきのお礼にお昼御飯ごちそうしたるわ！」

「そんなに気にしなくても良いんだけどな・・・。まあ、いいか。それじゃ、ご馳走になるうか」

「そうと決まったら早速出発やー！」

ニコニコと微笑むはやてに軽く苦笑しつつ、車椅子を押し図書館を出たその時だった。

「はやてちゃん！」

「あ、シャマルや！」

シャマルと呼ばれた女性。濃いベージュのコートに身を包んだ金髪ショートカットの女性だ。手には買い物に行ってきたのか、スーパーのレジ袋を持っていた。そしてその隣には、先日と俺と戦闘を繰り広げた人物。

「……シグナム」

「なっ!?!……雑賀」

烈火の将、ヴォルケンリッターのシグナムがそこにいた。

はやての自宅へと向かう道中、俺はシグナムと隣だって歩いていた。はやては先ほどシグナムと一緒に迎えに来たシャマルという女性と一緒に先を歩いている。

「はやてが今の主、なのか？」

「……その言い方からすると我等がどういった存在なのか知ったのか？」

「ウチには物知りな相棒が居てね」

「あの時、一緒にいた融合騎か・・・」

「ああ。夜天の書、それとその主を守る守護騎士ヴォルケンリツタ
ーだよな？」

「夜天の書・・・？」

「違うのか？」

「違うな、我等は闇の書の守護騎士だ。夜天の書ではない」

「む、そうなのか？」

今朝、輝夜と話したときには確かに夜天の書と言っていたことは間違いない。という事はあの時に一緒に言っていたなにかしらの機能が狂っていると言う事が当てはまるのだろう。ともかく輝夜に書を見てもらわないと俺としては判断がしがたいだろう。

「なあ、はやて」

「んー、どうしたん？」

「俺の家族なんだがもう1人だけ呼んでいいか？今、家で留守番してるんだが」

「ええよー、1人で留守番ちゅうのは結構寂しいモンやからなあ」

「サンキュー」

はやての許可を貰い、輝夜を呼ぶため携帯を取り出す。シグナムが言っている事の真偽を図るためだ。

俺の脳内では警笛がギンギンと鳴り響いていた。

第二話 とある休日と関西少女（後書き）

いかがでしたか？

作者的に結構がんばったつもりなのですが・・・。

誤字脱字の指摘、アドバイスや感想、お待ちしております。

とある騎士と共闘宣言（前書き）

長らくの放置すいませんでしたorz

難産というか文章が浮かばなかったというが、ともかくすいません
としか言いようが無いです。

とある騎士と共闘宣言

八神宅に着いた俺達。はやてとシャマルはキッチンで昼食の準備、そして遅れてやってきた輝夜と俺、シグナムはリビングのソファで向かい合うように座っていた。

既に輝夜についてはシグナムに説明済みなので、早速本題へと入った。

「さて、輝夜。例のアレ頼む」

「うむ」

俺の指示で輝夜が人差し指を伸ばし、一振りすると俺達が居るテーブル周りを囲むように不可視のフィールドが張られる。

「これは・・・!？」

「一種の幻覚魔法みたいなモノだ。これで周囲からは当たり障りの無い日常会話をしているようにみえるから。そのつもりの表情で」

「あ、ああ。分かった」

先に出されたお茶を一口飲み、口の中を湿らせる。内容が内容だけに、話す時間もかなり多く取られる事だろう。

「とりあえず、その間の書を見せてもらえるか？」

「あ、ああ」

シグナムから受け取った闇の書を、受け取り輝夜へと渡す。すると輝夜はそれを見定めるように入念に観察し、時折なにやらブツブツと呟いている。

「どうだ？なんか分かったか？」

「ふむ、やはりこれは夜天の書で間違いない。じゃが、所々に改変された痕跡が残っており。それが闇の書と呼ばれるに至ったバグの原因であろう」

「だが、もし壊れていると仮定して何故、我々ヴォルケンリッターはその事に誰一人気付かないのだ？」

「バグの影響じゃな。お主らの中に、歴代の主の最期を覚えている奴はいるのか？」

「いや、少なくとも私にはないな」

「恐らく書のバグの影響か、若しくは管制人格が意図的にその部分の記憶だけを消去しているのじゃろう」

「ふーん。そういえばはやては蒐集活動しているのは知らないんだろ？なんでだ？」

ふと、浮かび上がった疑問をシグナムに投げかける。

「主はやてから言われているのだ。他人に迷惑を掛けてはいけない。ただ、我等と穏やかに生活を送れば良いと」

「じゃ、なんでお前らはそれを無視して蒐集を？」

「それは主はやての為だ」

「「？」」

他人に迷惑が掛かるからと蒐集行為を禁じたはやての為に蒐集行為を行っている。指示と行動が完全に矛盾していた。

「いや、意味分かんねえけど？アンタ、自分で矛盾してるの判ってるよな？」

「無論だ。だが、そうしなければ主はやてのお命が危ないのだ」

「……どづいことだ？」

「実は……」

シグナムはゆっくりと守護騎士達が蒐集を始めた理由を語り始めた。

事の始まりは今年の6月。はやての9歳の誕生日の夜、闇の書が起動したところだった。魔法という技術を持たないこの地で突如現れた守護騎士たちを受け入れ、家族として扱い、今までの連戦の日々の中で今の暮らしが夢うつつであるかのような日々を過ごしていた。

そして時が過ぎ10月のある日、はやては急に胸の痛みを訴え倒れてしまう。そして急いで病院へ搬送するも、担当医から告げられた言葉は「下半身の麻痺が上半身へと徐々に上がってきている。このままではいずれ心臓に到達し死に至る」という到底信じたくないものだったらしい。

そしてそれが書の侵蝕によるものと判明。ならば書の頁を集め、

書の主として完全に覚醒させれば侵蝕が止まると考え、はやてには秘したまま蒐集に当たっていたらしい。

「なるほど……。輝夜、夜天の書だった時はそんな機能あったのか？」

「そんな機能は無かったのじゃ。本来夜天の書は長い時間を掛けて頁を埋め、次世代にその技術を継承させる物。寧ろ主の命を侵蝕するなどデバイスとして本末転倒じゃ。おそらく以前の所有者が弄くり回した結果じゃろう」

「ふむ……。解決策は？」

「考えられるのは3つじゃな。1つ目は書の破壊。一番簡単じゃが、これは即ち守護騎士の消滅を意味するからの、却下じゃ。2つ目は、このまま蒐集を管理者権限が行使できるところまで続けて改変してあるところを書き直すという事じゃな。じゃが、これは下手をすればバグが暴走し、大きな次元災害となりかねん。最悪、管理局の手によって地球諸共消滅させられるかも知れん。そして最後は、ロジカル面での攻略、所謂バグ修正じゃな。時間は多少掛かるが周りの被害の事も考えればこれが一番安全じゃな」

「そんなことできんのか？」

「フツ、馬鹿め。この妾を誰だと思っておるのじゃ？知恵と守護の月精、輝夜じゃぞ？その程度、造作も無いのじゃ」

見事にペタンコな胸をこれでもかと言うぐらい偉そうに張る輝夜。それを見る、俺とシグナムは苦笑を浮かべていた。

「だそうだ。どうする、良かったら俺達も協力するが？」

「それはありがたいが・・・、いいのか？最悪お前も管理局に追われる身となりかねないんだぞ？」

「ん？気にすんなよ。それに、前にも言ったと思うが、友達^{ダチ}助けんの理由が必要か？」

「・・・そうか。そう、だな。すまない、そしてありがとう」

「ま、任せときな」

頭を垂れるシグナムを見て俺は、書の主従関係など関係なしにただ純粹にはやてが大事なんだと思った。

「皆、お昼^ゴ飯できたでー？」

「んじゃ、行くか？」

「ああ、そうだな」

「妾もお腹が空いたのじゃー」

ソファから立ち上がりダイニングテーブルへと足を運ぶ。そこにはエプロンを着たはやてとシャルマルがテーブルの上に料理を並べていた。

「そっいや、なんや楽しそうにお喋りしてたけどなんの話だったん？」

「ん？まあ、あれだ。はやてはすごく可愛いんだっていうシグナムの惚気話を延々と、ね？」

「なっ！？／＼／＼／＼雑賀ッ！でたらめな事を言うな！！」

「ハハハッ、冗談だ」

「なんや、二人とも仲がええなあ」

あはは、と笑いながらもどこか羨ましそうな表情を浮かべるはやて。両親も居なく、足の事から長らく学校へ行っていないと聞いていたはやて。そして6月に現れた守護岸

「ん？まあ、ダチだからな。当然、はやても俺のダチだぞ？」

「・・・そうなん？」

「まあな。拳を交わす。一緒に遊ぶ。同じ釜の飯を食う。どれか一つでも済ましたらソイツはもうダチだ。つーことは、今から一緒に昼飯を食う俺達は今もうダチって事だ」

「なんや、それ。古い映画みたいな台詞やな」

「ん？そうか？まあ、祖父ちゃんが言った事だから古いつちや古いわな」

「ふふふ、どれど飯冷めてまう前に食べよか？」

はやての言葉に従い各々席に着いた。祖父ちゃんが逝って以来、2人以上での食事は久しぶりだ。学校でも弁当は基本的に一人で食

べていたし、家では輝夜と二人きりだったからだ。

「それじゃ、頂きます」

「」「」「頂きます」「」「」

そのときの食事の味は、はやての腕が良かったのか、それとも他に原因があったのか普段より美味しく感じた。

結局、そのあと長居してしまい、夕食までご馳走になる羽目になっちゃった。

まあ、はやてもなんだかんだで楽しそうにしていたのと、夕方に帰ってきた残りの守護騎士である、ヴィータとザフィーラにも会う事が出来たので結果オーライというべきか。

そして今は夜、自宅へと帰る途中の道中である。泊まっていたらどうか？とも言われたが生憎と明日は月曜。学校があるので丁重にお断りして、まあ、次の機会があればという事にしといた。

「シグナム・・・」

「ん？どうした？」

「いやつだな、はやては」

途中まで送るといつて付いて来たシグナムに声を掛ける。つなみに輝夜は眠気が限界まで来ていたのか、アウトフレームのまま俺の背中を立っていた。

「当たり前だ。所詮はプログラム体でしかない我々を家族と呼び、平穩と安らぎを与えてくれた。だからこそ守護騎士全員が主はやてを敬愛し、守護するためならば命を賭する事が出来る。無論、私を含めて、な」

穩やかな口調で語るシグナムの表情は月明かりに照らされ、より一層凜々しく美しく見え、不覚にも一瞬ドキッとしてしまうほどだった。

「そうか。なら、絶対に守ってやらないとな」

「ああ。勿論」

そしてしばらく沈黙が続き、

「雑賀」

「あん？」

「その、なんだ・・・感謝する」

「なんだ？いきなり」

「お前がこの件に関わるようになってしまったのも元はといえば私がお前を襲ったからだ。にも拘らず主はやての為にはいえ・・・だから、感謝している」

「ま、多少の危険は承知の上だしな。前にも言ったがダチの為だからなこれぐらいなんとも無いし・・・まあ、一応受け取っておく

わ。それに・・・」

「？」

「俺はシグナム、アンタの事嫌いじゃないぜ？むしろ好きな方だと
言える」

「は？」

「無論、一人の女として、な」

「なッ！？／＼／＼／＼／＼」

「つと、ここまででいいか。送ってくれてサンキューな？じゃ」

顔を真っ赤にしたまま微動だにしないシグナムをそのまま放置し、
輝夜を背に負ぶったま自宅へと足を向け、歩き出した。

「んー、これが初恋ってやつなのかねー？」

そこから自宅までの足取りは普段よりも随分と軽いものだった。

〈シグナムSIDE〉

雑賀を見送り、自宅へと戻った私の頭の中はぐるぐると混乱して
いた。

「お、シグナムお帰りー、ってどうしたん？顔が真っ赤やで？」

「ああ、いえ。別に何でもありません」

確かに先ほどから顔が火照っているような気がしていたが、先ほどの動揺が顔に出てしまっているとは思わなかった。

「何でもありませんってそんなわけあらへんやろ、風邪でもひいたんちゃうか？今日はもう休んどき」

「いえ、そういうわけでは・・・」

「ええから早く！風邪は引き始めが肝心なんやで？拗らせでもしたらもつと大変なんやから。さ、早く寝るッ！！これは主としての命令や！！」

「・・・わかりました」

なにやら主はやては私が風邪を引いたと勘違いをしているようだが、特になんとも無いのだから、明日の朝には誤解も解けるだろう。そう思い、寝室へ入りベッドに身体を預けるが、

「・・・・・・・・寝れない」

先ほどの雑賀の発言には柄にも無く動揺をしてしまった。別に嫌だった訳ではない。私とて女だ、好意を示されて嬉しくないということはない。だが、私は所詮プログラム体、さらに言えば私は騎士だ。そんな私が色恋事に現をぬかして言い訳が無い。だが、

「なんなのだろうな。この胸を締め付けるような感覚は・・・」

結局その日は一睡も出来ずに、翌朝目元に隈を作っている私を見て、主はやてに余計な心配を掛けてしまうことにはその時には気付かなかつた。

とある騎士と共闘宣言（後書き）

いかがでしたか？

これからもがんばりますので、叱咤激励や感想をお待ちしております。

もちろん、アドバイスや誤字脱字の指摘も待っています。

第四話 とある騎士達の初邂逅（前書き）

すいませんでしたorz

リアルが忙しく筆が思うより進みませんでした。

これからもこのような事があるかもしれないがご容赦ください

「数が少ないか・・・、やりすぎてこの世界の生態系に悪影響が出るかもしれないから、乱獲紛いのことも出来ないと・・・」

ヴィータが持つてきていた書に魔力を食わせる。

「ま、急いで事は仕損じるって言っし、ここは急がば回れって事で地道にやって行くしかないでしょ？輝夜もまだ書の修正方法を検索してる途中だしな」

「よくわかんねえけど、ほんとにはやては大丈夫なんだろうな？」

「大丈夫だって。俺の相棒を信用しろって、な？」

「・・・うん」

「うっし、じゃ俺は次に行くけどお前はどっする？」

「あたしはシグナム達と合流する」

「そうか、んじゃまた後でな」

「ああ。そつちもしつかりな」

蒐集し終えた書をヴィータに手渡すと彼女は早々と転移魔法で次の目標を探すべく行ってしまった。

ヴィータと分かれた後、修復方法を検索していた輝夜と合流した。修復方法の検索にひと段落がついたそうで、息抜きに出てきたそう

だ。

「へ、世界は違っても月はあるのか……」

「無論じゃ、我が国ベルカの月もなかなか綺麗なモノなのじゃぞ？」

暗い森の中、俺は独り言のつもりで言った言葉に相棒が律儀に答えてくれた。

人工的な明かりは一切なく、唯一の明かりと云えば優しく照りつける月の明かりだけ。

「宵闇の我が道照らす月光かな、つて所か？」

「65点じゃな。己を詩人と語るならもつと精進じゃな。」

「これは手厳しいな。で、お目当てのは居るか？」

「ふむ、もうちと待っておれ。」

そう一言だけ返すと彼女はまた目を瞑り、魔力走査を再開する。

「……む、掛かったようじゃ。Aが1人、Bが2人の計3人じゃな。」

「へえ、今日一番の大物じゃないか？」

手に持つデバイスを肩にトンと担ぎなおし、そしてゆっくりと目標に照準を合わせる。

「さて、挨拶代わりだ。」

そうやって引き金を引くと、赤褐色の魔力弾が一速に飛んでいき、目標の1人に見事的中した。

「じゃ 行くぜ、輝夜？」

「承知した、我が主」

狙撃をした木から飛び降り、そのまま飛行魔法で目標へと接近した。

「ぐあっ!？」

突如聞こえた発砲音のような音と共に一緒に行動していた。仲間の1人がその場に倒れこんだ。

「どうした!？」

「て、敵襲です!！」

「なに?規模は!？」

「それが、おそらくひと「があッ!？」

「おい、どうした?おい、返事をしろ!？クソッ」

スリーマンセルで活動していたが、戦闘が出来る状況にあるのは既にこの男1人。

応援を呼ぶにもついさっき張られた結界によって外部との通信は閉

ざされていた。

「クツ、やるしかないのか……。」

男はデバイスを構え、未だ見えぬ襲撃者に備える。

敵は恐らく一人、相当の手練と見える。だが、この男にもAランク保持者としての維持があった。

「ッ!？」

《Protection》

ギリギリの所で反応が間に合い。咄嗟にシールドを張り、攻撃を防ぐ事に成功した。

「そこか！行けッ!!！」

《Shooting Bullet Fire》

水色の魔力光が輝き、敵が居るほうへと魔力弾が一齐に飛んでいく。

《防御陣展開》

だが、それも相手の防御であっさりと打ち消されてしまった。

「なかなか強いね。おっさん」

そんな声と共に木陰から姿を現したのはライフル型のデバイスを肩に担ぎ、歳に合わないニヒルな笑みを浮かべる少年とその反対側の

肩に腰を掛けた2〜30センチほどの小さな女性だった。

「管理局員への攻撃……。これは立派な犯罪だぞ？解っているのか？」

「まあ、ね。その辺はこつちも承知の上さ。行くぜ？」

肩に担いだ銃を再び構えなおす。

「クツ、ならば捕まえて目的を聞き出すだけだ！！」

《Magillink sword Active》

男の持つデバイスの柄が短くなり、その先端から魔力で出来た刃が浮かび上がる。

「なるほど、射撃系なら格闘には弱いと……。けどな」

腰にあるストックポーチに手を伸ばし、弾丸の様な物を一つデバイスの中へと込める。

《装填確認》

「遅すぎるぜ？アンタ」

ガコンという音と共に先ほど込めた弾丸の空薬莖が薬室から吐き出される。

「サービスだ。持って逝きな？」

《充填完了》

「一弾入魂ッ!!」

《赤龍火砲》

引き金を引くとマズルフラッシュと共に光速の弾丸が男を貫いた。

「勝負あり・・・ってか？」

「うぐ・・・。これほどの実力・・・貴様は一体・・・？」

「さてね、名乗るほどの者でもないさ。じゃ、お前らの魔力貰って行くぜ？」

少年は倒れ伏している男達に手を伸ばす。

『ぐはあああああっ』

月が照らす森の中に男達の断末魔が響いた。

「さて、今日はこれぐらいか？」

「ふむ、そうじゃな。時間的にもそろそろ頃合じゃ」

「孫幸、蒐集は終わったか？」

俺の名を呼ぶ声と共に降りてきた1人の女性。シグナムだ。

「ん。まあ、そこそこだな。Aランクが3人、Bが5人。あとCが8人の計16人って所だ」

「ふむ、なかなか早いペースだな」

シグナムが感心した風の言葉を告げる。

それに対し此方もまた

「そりゃ、こっちは射撃っつーか基本狙撃がメインだからな。逃げられる前に全員仕留めてるし」

近接と狙撃からの遠方攻撃、その差は仕様が無いと慰めにも似た言葉返す。

「そっぴゃ、ヴィータは？一緒だったろ？」

「ああ、ヴィータならザフィーラと一緒にだ。恐らくまだ蒐集の途中だろう」

ヴィータとザフィーラ、この2人もまた守護騎士のメンバーであり、それぞれ紅の鉄騎、蒼き狼という二つ名を持っている。

「そんじゃ、蒐集した魔力を納めがてら迎えに行きましょうかねえ。シグナムはどうする？」

「ふむ、ならば私も行く」

「そうかい？じゃ、輝夜。転移よろしく」

「うむ、任せるのじゃ」

すると孫幸らを囲むように漆黒の魔法陣が展開される。

そして魔法陣の光がより強くなるとその場から姿を消し去っていた。

転移によりやってきた世界。

ここは先ほどまで孫幸らがいた世界とは異なり、自然が少なく大地は無機物で覆われ上を見上げれば空ではなく天高く聳える高層ビル群が建ち並んでいる。

季節は冬。夜の帳が降りて間もない時間帯である。

「なあ、ヴィータなんかヤバそうじゃね？」

「む、確かに。私が行ってこよう。お前は……」

「孫、あそこにシャマルが居るのじゃ」

「ん、マジだ。そんじゃ俺はシャマルと一緒にいるわ」

「了解した」

別れようとする風に乗って見覚えのある紅い帽子が飛んできた。ヴィータの帽子である。所々に損傷の後があった。

「ん、これは……シグナム」

「なんだ？」

「これをヴィータに、簡単だが修繕はしておいた」

「解かった。」

「じゃ、気をつけてな？」

ヴィータの帽子をシグナムに手渡すと孫幸はシャマルの下へと飛んでいった。

「これはまた派手にやってるねえ」

「孫幸君と輝夜ちゃん・・・？」

「うむ、シャマルはお使いの帰りか？」

そう言つて孫幸がシャマルの足元を指差す。

そこには食材やいろいろな物が入った買い物袋が置いてあつた。

「ええ、皆の向かえがてらにいつものオリーブオイルを買いに出ただけど・・・」

「そこに蒐集作業をしてるヴィータ達を見つけた・・・かの？」

「はやくには連絡をしたのか？」

「ええ、それはもちろん」

それだけ言葉を交わし、視線は自ずと派手な戦闘を繰り広げている

シグナム達に向けられる。

今の所騎士達は各々の相手の優位に立っているようだ。

金髪で黒いバリアジャケットの少女がシグナムと、民族衣装のような少年がヴィータ、そしてザフィーラは赤毛の狼型の使い魔と戦っている。

そしてもう一人。白いバリアジャケットの少女が離れたビルの上で戦いの様子を見守っていた。シャマルに聞けば先ほどまでヴィータと戦闘を繰り返していたが、攻撃が直撃し、負傷しているのだと言う。隣ではシャマルがクラールヴィントと起動し旅の鏡を展開、白い少女のリンカーコアを直接狙っていた。

戦いも終盤に入った頃、事態は動き出した。

先ほどの白い少女が自身の身を護っていた結界陣から抜け出し魔法を行使し始めたのだ。

「輝夜、あれは・・・？」

「ふむ、収束砲じゃな。周りの魔力素を取り込んで自身の魔法に掛け合わせる物じゃ」

「へー、便利だな」

「じゃが、あれはあの少女のような幼き身体では負担が大きいにじやがの」

輝夜の言葉に白い少女がそこまでして身体を張る事に感心している時だった。

突如、白い少女の胸部から見覚えのある腕が生えてきたのだ。

「しまった！外しちゃった」

シャマルからそんな声が聞こえ振り向くと再度リンカーコアを掴もうと旅の鏡へと手を伸ばしているのが目に映った。

再び孫幸は視線を少女へ戻す。

今度は成功したようで胸から出ているシャマルの手には淡く光るリンカーコアがあった。

「うわ、なんかグロいな・・・」

孫幸の脳内で一瞬だが「臍物ブチ撒けるオツ！！」というなんとも暴力的な言葉と共に旅の鏡を行使するシャマルの図が浮かび上がったのはマンガの読み過ぎなのだろう。

「む！？孫、これは危険じゃー！！」

「どうした？」

今まで沈黙を保っていた輝夜が急に大声を上げる。

「あやつはあのまま収束砲を放つ気じゃー！！」

「それが、どうかしたのか？」

「バカモノ！！あやつは今シャマルに魔力を抜かれたばかりで、魔力が十分に無いんじゃないぞ？
にも拘らずそのままアレが放たれれば」

そこまで言った時点で孫幸もその事態の重さに気付いたようだ。

魔力が枯渇すると生命に危険が生じる。
魔導師ならば誰もが知っている常識だ。
だが、それをも省みず彼女は味方を助けるべく枯渇しかけの魔力を
使い魔法を行使しようとしているのだ。

「チツ、マジかよ!?!」

そう一言だけ毒づき、八咫鴉の照準を彼女の持つデバイス、そして
彼女自身へと向ける。

響く発砲音2回。

1発目で彼女の手にあるデバイスを撃ち抜き。

2発目で彼女を撃ち抜き気絶させる。

「ふう、これでどうよ?」

「うむ、上出来じゃな」

照準を合せる所から此処まで約5秒。これまで早く動けたのは孫幸
自身ですら驚愕していた。

『さて、時間も時間だし、俺としては撤退を提案するが?』

思念通話を守護騎士達に放ち、撤退か否かを問い掛ける。

『そうだな。長引けば主はやてに要らぬ心配を掛けてしまう』

『アタシもそれに賛成』

『俺も異論ない』

『それじゃ、一旦散っていつもの所でまた集合』

『了解』

通話を終わると、守護騎士達は各々別方向に撤退して行く。孫幸はそれを見届けると、輝夜に声を掛ける。

「じゃ、輝夜。ランダム転移」

「うむ、妾に任せるのじゃ」

最後に仲間に抱えられている白い少女を一瞥し、その場を後にした。各自散開した後、途中でシャマルと落ち合った孫幸はそのまま八神宅へと足を進めていた。

「よお、邪魔するぜ。」

「お、輝夜と兄ちゃんも来たんかー？」

「そなたの作る食事は美味であるからな、来てやったのじゃ」

「馬鹿を言ってるんじゃないよ、本当はさっきそこでシャマルに会ってたな。あ、これお土産」

コンビニのビニール袋の中には色々な味を揃えたハー ンダッツ。

「それはおおきになー。ほんなら、デザートに皆で食べよかー」

「ん、そうしてくれ」

その後、孫幸を含めヴォルケンリッター全員で夕食を食べ、なし崩し的に八神宅へ泊まる事となった。そして、現在はやてはシャマル、ヴィータを連れて入浴中である。

残された孫幸と輝夜、シグナムそしてザフィーラはそれぞれ自由に活動をしていた。

「さて、シグナム」

「なんだ？」

不意に声を掛けられたシグナムは読んでいる新聞をテーブルに置き孫幸へと向き直る。

会話が気になるのかザフィーラも狼モードのまま顔だけを此方へと向けている。ちなみに輝夜は自分専用の湯呑みでお茶を啜っている。

「脱げ」

「ブフーーーーッ!!!？」

「……………は？」

孫幸の一言に、輝夜はお茶を噴き出しシグナムとザフィーラは口を開き、ポカンとしている。

「汚いぞ、輝夜」

「汚いぞ、ではないわッ!!い、いきなり脱げなどと破廉恥な、ど

うしてもというなら妾に命じてくれれば……ゴニョゴニョノ
ノノノ

「な、なぜ私なんだ？ほ、他にも主はやてとかシャマルやヴィータ
も……、いや別にお

前が嫌だとかそう言う意味では無いのだが、お互いにまだ早すぎる
と言つか……」

テンパって何が何だか分からず色々と呟く二人をよそに一人（匹）
？冷静にザフィーラが孫幸に問い掛ける。

「何故、いきなり脱げなどと？」

「シグナム、さっきの戦闘で腹ノ所に怪我したろ？だから、治癒魔
法掛けようかと思っただんだが？」

「ふむ、なるほど」

孫幸の答えにザフィーラは納得し、同じように聞いていたシグナム
ら二人は奇怪な行動をピタツと止める。

「わ、童もそんな所だろうと思っておったのじゃ。ハハハ……」

「無論、私もだ。疚しい考えなどこれっぽっちも無いぞ。」

アハハハ、と濁いた笑みを浮かべる二人に対しザフィーラはやれや
れと言った表情で再び床に伏せた。

「とにかく早く傷を見せてみる。はやてが風呂から上がってくるぞ
？」

「あ、ああ。頼む」

孫幸の声にシグナムはセーターの裾を捲り上げ腹部を見せる。そこにはおよそ歴戦の剣騎士とは思えないほどに透き通った白い綺麗な肌と、赤くなった一筋の剣痕あった。

「シグナムの甲冑を打ち貫くか……。相当の腕じゃの」

「ああ、良き師に学んだのだろう。澄んだ剣筋だった」

治癒を促す魔力光が優しく輝く。早速効果が出てきたのか先ほどよりも痕が薄くなっているのが目に見えて分かる。

「それでも、お前は負けない。だろう？」

「無論だ。一対多数ならともかく一対一においてベルカの騎士に負けはない」

そう言うとシグナムは空に浮かぶ月を見上げる。こうして八神家の夜は更けていった。

第四話 とある騎士達の初邂逅（後書き）

いかがでしたか？

意見や感想、アドバイスお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4572/>

魔法少女リリカルなのは～三つ足の鴉～

2010年10月10日22時40分発行